

全国大会出場

全国高等学校ライフル射撃競技選抜大会

(3月26日～27日・広島県)

森脇 大貴君 (川面町)



高梁城南高校2年
「緊張して実力を発揮できず残念でした。今後はインターハイ出場を目指し、全国の舞台でリベンジしたいと思います」

春季全日本小学生男子ソフトボール大会

(3月26日～28日・京都府)

内藤 清広君 (中井町)



中井小学校3年
「全国には足の速い選手が多くてびっくりしました。夏の全国大会にも出場して、良い結果を残したいと思います」

※学年は大会出場時

消防功労者表彰

消防庁長官表彰

功労章

片山修一 (団本部)

永年勤続功労章

加藤浩之、石田雄一、鈴木貴雄 (団本部)、加藤典男 (吹屋)

日本消防協会会長表彰

功績章

江川文人 (団本部)

精績章

鈴木貴雄 (団本部)、加藤典男 (吹屋)、西平勝年 (成羽)

勤続章

江川文人 (団本部)、高下幸彦 (中)、清水操 (湯野)、石川員

啓、鷺尾芳通、三村義博 (手)

荘、瀧川達也、石井一年 (大)

賀、清迫浩亨 (成羽)、森本修

一 (巨瀬)、小田弘人 (松原)、川

上勝 (中)

(階級順・敬称略)

大河賞

平成28年

地域の産業振興に功績のあった個人や団体を顕彰する「大河賞」の受賞者が決まりました。

同賞は、故大河寅蔵・元高梁町長の遺族からの寄付をもとに基金を設け、昭和40年から表彰しています。

商工業振興部門

仲田泰彦さん

高梁商工会議所の会頭時代に陣頭指揮をとり、農商工連携による商品開発など地域商業の振興に尽力され、高梁学生応援協力を設立し、学園文化都市の実践を通じて地域経済の維持・発展に大きく貢献しました。また、地域初の大型ショッピングセンターの開店など、現在に至るまで地元雇用と地域商業発展に尽力しています。



前列左2人目から、受賞者の江草克典さん・仲田泰彦さん・中山喜祐さん

地域農業振興部門

中山喜祐さん

びほく農業協同組合管内のぶどう生産組織を統合して発足したぶどう生産部会の代表を当初から努め、生産者技術の平準化や栽培環境の安全に対応するGAP(農業生産工程管理)の導入を積極的に取り組みました。また、水温ぶどう施設利用組合の設立以来、組合長として水温冷蔵庫を利用した有利販売に取り組み、組合員の所得向上に尽力しています。

問 農林課 ☎(21)0223

歌書画三芸

清水比庵



第4回

文 加古一朗

歴史美術館主任学芸員

昭和5年(1930)7月、比庵は日光町(現栃木県日光市)の町長に就任し、「歌人町長」として知られました。町長としての行政手腕も高く評価されており、特に町役場に観光課を新設し、全国宣伝を行い、今日の観光行政の基礎を築いたと評されています。

また、当時東洋一と言われた「細尾スケートリンク」を完成させ、町民の体育活動と学校教育に貢献したことも評価されており、今日の日光市の存在の根本を規定するような施策を展開したのです。このことは、昭和33年、徳川家正、小杉放庵とともに初代日光市名誉市民に推戴された大きな理由となっています。

昭和8年、歌集「朝明」を発行し、特に長歌は歌壇に注目され、文芸評論家・保田與重郎らに高い評価を受けました。

また、昭和10年6月には秋原朔太郎、岡本一平・かの子夫妻、中河與一・幹子夫妻といった歌人、作家を

日光・中禅寺湖に招き、「慈悲心鳥を聴く会」を主宰し、文芸交流を深めました。

「比庵」の雅号を用い始めたのも、この年からのことでした。昭和14年、9年余り勤めた日光町長を辞し、娘・明子の住む千葉県市川市に移りました。この年、「二荒」は石川暮人が主宰する「下野短歌」と合併し、比庵の作歌活動はここを中心に行われることになりました。

これ以後、比庵は芸術三昧の生活を送ろうとしていたところ、昭和17年11月23日、妻・鶴代が突然亡くなりました。比庵の落胆は計り知れず、笠岡の妹・章子の元へ行き、久しく慰めの時を持ちまし



春のななり

「見たせば四方のさくらも咲きいでてあはれ今年も春のななり」

たが、その悼みは容易には晴れませんでした。

実業家で、書画をよくした弟・浩(号・三溪)は、かねてから計画していた比庵・三溪兄弟展を兄への力添えと、鶴代も心待ちにしていたことから、予定通り翌12月に開催しました。展覧会名を「野水会展」と比庵が命名し、当時から巨匠として知られた日本画家・川合玉堂の賛助出品を得て、盛会となりました。

玉堂は当初、三溪が知遇を得て、その縁で比庵とも知り合うようになり、玉堂と比庵の交流は、玉堂没年まで15回続く野水会展の賛助に留まらず、比庵が玉堂を訪ねたり、書簡の往來をしたり、また、玉堂が画を描



瀧峠歌碑

「水清き川のながれて山高し日は山を出て川をわたるも」

き、比庵が歌を添える合作も制作され非常に深い関係を築きました。特に二人は短歌をよくし、このことがさらに二人の交流を強くした理由でした。そのような中、戦争の影響は比庵の活動にも影響し、『下野短歌』の休刊や野水会の一時的中止、さらには笠岡への疎開など重なりました。戦後、昭和22年になって、東京都豊島区での生活が始まり、再び、比庵の芸術活動も充実していきます。それに伴い、岡山、東京を中心に、百貨店や画廊で比庵展が盛んに行われるようになり、歌人としてだけでなく、その書画作品も多くの人に知られ、歌・書・画三位一体の比庵芸術として評価を受けるようになりました。

昭和34年には日光市立公会堂前に最初の歌碑が建立され、現在では全国で30基を超え、高梁市内にも7基が建てられています。

(次号へつづく)

高梁偉人列伝⑨